

児童学研究法

—ふるまいを通して考える授業—

人間科学部 佐藤 啓子



1941年生まれ。お茶の水女子大学で児童学を専攻、幼児の集団活動、人格変容、人間関係等を学び、その基礎理論としての関係学、研究方法としての心理劇法（サイコドラマ）を研究し続けている。その成果をユーゴスラビア、オランダ、カナダ他で研究発表する傍ら、地域に開かれる研究活動として、大学周辺の地域の人々と共に、心理劇研究・活動もしている。学部ではこの他に、「児童学」「生涯教育研究」「生涯教育特殊研究」他を、大学院では、「家庭教育論特論」「女性学習論」を担当している。（さとう・ひろこ）

授業担当者だけが知識を伝達するのではなく、受講生のみならず自主学習やグループ学習でもなく、行為を媒介として授業担当者と受講生とが共にかかわりあい、共に創り出す授業展開をしていることが本授業の特色といえる。様々な児童学実践研究方法の中で、特に心理劇的研究方法に力点が置かれ、受講生がその方法的特色について体験的に学習することと、児童に関する課題解決へ心理劇を活用することへの糸口をつかむことがめざされている。

1 授業環境

文教大学越谷キャンパス6号館には、多目的室と称する628教室がある。お世辞にも、美しいとも整っているとも言い難いが、木曜日4限目の「児童学研究法」の開始直前には、突然様変わりする。受講生たちによって、通常はコの字型に並べられている机が教室前方に寄せられ、その空間に、後方部に積み重ねられている木製の直方体（縦1メートル横2メートル高さ30センチ）を組み合わせ、時には3段の、時には1段の特設舞台が設営される。舞台の周辺には椅子が並べられ、ビデオセットやカセットも設定される。時には天井からのライトをつけて、



舞台上を焦点化することもある。

緊張と興奮の入り混じったこの不思議な空間で、いよいよ授業が開始される。

2 ウォーミングアップ

この舞台は、ある時は人の心の世界となり、ある時は家庭のリビングルーム、公園や森の中、オフィスや学校、ファンタジックな童話の世界等々になる。その時々に必要な課題に応じて、受講生はこの舞台上で、子供、父親、母親、さらには樹木や花、風神や雷神、コンピューターや粘土等々の役割を担い、筋書きの無いドラマ、即ち即興劇を演じるのである。当然のことながら、いきなりこれらの役割を演じるのは困難なため、行為することに抵抗を少なくしたり、慣れるためのウォーミングアップと称する準備段階が必要となる。例えば、今自分の座っている席から別の席へ移動してみる、移動の前後では体験の異なること、それは移動という行為に拠っていることを確認したり、2人のペアにより、①自分の正面、

②真横、③真後ろ、と相手が位置を変えたとき、また正面に位置しつつ相手が自分を、①下から見上げたとき、②同じ高さから見つめたとき、③上から見下ろしたとき、④さらに椅子の上に乗より高い位置から見下ろしたとき、それぞれに応じて自分の感じ方が異なること、それも対人的な位置や高さのとりかたという行為に拠っていること等を確認する。または、授業担当者（監督）が様々な役割（幼児、母親、銀行員、会社員、老人、八百屋他）の役割を演じ、それに呼応する役割を一人ひとりの受講生が演じ、多様な役割を演じること、見ることに慣れていく等をすることもある。



3 授業の目的と展開

このウォーミングアップに先立ち、受講生は児童に関する実践研究方法として、内観法、参加観察法、心理劇法、観察法、実験法等についての方法的特色と意義について概括的に学習している。本授業では、特に「心理劇法」（サイコドラマ）に力点を置き、その方法を実際に体験しながら、方法的特色を探ることがめざされている。

心理劇法とは、日常生活を縮図的に設定した場面において、参加者が即興的に必要な役割を演じながら、自らの行為の可能性の拡大や、人間関係の発展を模索する方法である。心理劇は、教育・臨床・相談・看護・矯正・産業などの諸領域において、活用されている。

本授業では、二年次の授業「児童学」において学習した理論的な内容を、より実践的に深める意味において、教育的アプローチとなっている。

また、この心理劇法を実施するに当たり、場面を設定し進行に責任をもつ監督的役割、劇を即興的に演じる演者的役割、劇の進行を見守ったり劇後の感想や意見を述べたりする観客的役割、参加者個人や集団の補助的・間的な役割を担う補助自我的役割、そして舞台的役割が必要になるが、受講生は年間の体験を通して、これらのどの役割も担えるようになることが望まれている。



4 授業の進行と形式

毎時の授業は次のように進められる。(1) 監督による場面設定、(2) 行為・演技の展開、(3) 役割を演じてみて、あるいは見ているの感想を、小グループや全体で話し合い、(4) その後監督の意図や全体をとおしての解説が行われる。(5) 受講生は、その日の各自の感想を所定の用紙に記述して、次の授業時間までに提出する。(6) 提出された感想文の中から、時々一部が授業担当者により紹介される。

年間の授業展開としては、大まかに、

(1) 「心理劇法」とは何かについて、その方法的特色について体験的に学習する段階、(2) 応用心理劇研究として、児童をとりまく生活例を場面設定し、課題探索的な学習をする段階、(3) 受講生自らが監督的役割を担いながら場面展開をし、監督養成がされる段階、という3部構成となっている。

5 授業内容例

授業の具体的な内容（テーマ）例をあげよう。

(1) 親と子のかかわり方の学習例

- ① 母（父）と子（幼児）の散歩途中、突然子どもが咲いている花をむしり取った。さて、
 - ② 仕事ばかり熱心で、家庭や子どもに関心を示さない父をめぐって
 - ③ 子どもの学業成績ばかりを気にかける母をめぐって
 - ④ その他
- (2) 家族のライフサイクルの学習例
- ① 恋人同士が結婚を決意する
 - ② 新婚生活時代
 - ③ 第1子の誕生とその後の生活をめぐる様々な出来事
 - ④ 第2子の誕生とその後の生活をめぐる様々な出来事
 - ⑤ 夫婦の様々な葛藤
 - ⑥ 子どもの結婚をめぐって
 - ⑦ 子どもの独立と新しい家族関係
 - ⑧ 孫の誕生と交流
 - ⑨ 夫の定年と新しい生活スタイル
 - ⑩ 配偶者の死
 - ⑪ 静かな余生
- (3) 家庭と学校・地域との関係学習
- ① P. T. A 活動をめぐって
 - ② ゴルフ場の開発をめぐる地域の賛成派住民と反対派住民の言い分、そして家庭では
 - ③ その他

6 受講生の感想から

この授業に参加した受講生には、どんなことが育つのであろうか。その年度により、また個人により様々であるが、素直に年間の自己変化について述べている2つの感想文を紹介したい。

(1) 1年間という歳月は、いつの間にか過ぎてしまった。私は最初、この授業を履修しようか、しまいかと悩んだが、今は自分で選んだ授業だという気持ちである。

私は自己紹介の時点から VTR に映し出されるぎこちない自分をどうにかしたいと思い続けていた。しかし、授業を重ねても緊張感も恥ずかしさも変わらず、ひらめ

きも出てこず、毎回毎日が反省の連続であった。他の人々はあんなにも上手に対応しているのにと、授業に参加するのも嫌になった時もあった。しかし、ここで休むと逃げることになると思い、自分を少しずつ変えながら参加しているうちに前向きになることができ、一回一回の微妙な内なる変化を感じることが出来た。次第にその日毎の授業への参加の仕方、意気込みの変化が、自分自身でもわかるようになってきた。

—中略—

次第に、観客で見ているときには思いきり笑い、考えた。これはただ観客ばかりをやって得られる感情ではなく、演者をやって得られることだと思う。観客は、「自分だったらこうする」などと演者の表現を自分のこととして置き換えながら見たり、また自分では気づかなかつたふるまい方に気づかせられたりすることもあった。こんなことを繰り返しているうちに、最善の方法を模索出来たり、自分の行為の可能性の幅が自然に広がっていたりした。

—中略—

すでに授業は終了してしまっただが、自分なりに「心理劇法」について、詳しく学んでいきたい。

(2) 1年間のこの授業を振り返ってみると、この授業を受けてきた私達はとても進歩したと改めて感じる。初めのころ、本当に初歩的なことから始めて、これがどう児童学につながるのだろうと疑問に思うこともしばしばであった。だが実際にやってみると、自分のやりたいようにやれなかったり、頭が真っ白になったり、アイデアが浮かばなかったり、席に戻った途端、こうすれば良かった、ああすれば良かったと反省してばかりだった。それが、いつの間にか楽しんでできるようになった。

—中略—

この授業で得たものは大きいと思う。まず、他の人の演技を見たり、感想を重ねて

いくうちに、イメージをどんどんふくらませていくことができる。例えば、母親のありかたというとき、自分の頭の中に思いつく母親像や、自分が演じる母親役は限られてしまう。だが他の人の演技を見ることによって、こういう可能性もあったのだなどと、自分では思いつきもしなかったことに気づいたりする。それを繰り返すことによって、イメージやアイディアの幅を拡げることができる。また、他の人の感想を聞くことによって、自分の演じたことがどんな意味があったのかとか、周りにどんな影響を与えているのかという他者から見た自分自身に気づくことができるのである。また、演技をしている相手役がどんな反応を返してくるかがわからないため、多様なかわりかたの可能性を考えたり、ふるまったりすることの練習にもなるのである。いろいろな場面に対応できるような力が身についたように思う。さらに、監督の役割

を体験したことにより、人あたりのよさ、内容の進め方・まとめかたなど、リーダーとしての在り方についても学ぶことができた。

この授業で学んだことを、今後一人の社会人として、親として、人間として前向きに活かしていきたい。

7 授業担当者として

この授業に参加して変化するのは受講生たちのみではない。授業担当者もまた変化しているのである。受講生の感想からハッとさせられたり、思いもつかないアイディアを提供されて感心したり、毎回夜中の2時までかかって書き続けたという感想文を読んでは励まされたりもして、その都度私自身の人格が大きく膨らんでいく気がしている。毎年一年間を経過すると、一人ひとりの受講生の存在の重みを確かな手応えとして感じつつ、受講生たちに感謝している。